

# キャリア教育を充実させる教育課程の実現に向けた課題と協働体制の構築に関する研究

教育実践力高度化コース 18AD008

齊藤 明彦

【指導教員】 小倉 康 上園 竜之介 安原 輝彦

【キーワード】 キャリア教育 進路指導 基礎的・汎用的能力 教育課程 協働体制

## 1. 研究の背景

社会情勢の変動が激しい 21 世紀は知識基盤社会と言われる、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す時代であると言われている。日本においては、少子高齢化やグローバル化、産業・経済の構造的、質的变化、雇用の多様化・流動化等が進んでいる。そんな中、子どもたちの進路をめぐる環境は大きく変化している。また、学校教育を取り巻く環境も大きく変化してきており、子どもたちが「生きる力」を身に付け、社会人、職業人として自立していくことができるようにする教育の推進が強く求められている。

文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」(2011)によれば、「我が国において「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、平成 11 年 12 月、中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」においてである。本答申では、「学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育(望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育)を小学校段階から発達段階に応じて実施する必要がある」と指摘した。さらに、中央教育審議会(以下、中教審)キャリア教育・職業教育特別部会(2009)は、キャリア教育の重要性について「各段階の中でも、中学校段階が極めて重要である」と指摘している。しかしながら、中教審答申(2011)「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(以下、「2011 年答申」)において、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義した上で、「キャリア教育のとらえ方が変化してきた経緯が十分に整理されてこなかった」ことが一因となり、キャリア教育について「一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準に、ばらつきがある」ことが課題とされた。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)によると、「中学校においては、充実した職場体験活動を生かしながら、キャリア教育のねらいに立ち返り、3 年間を通して生徒のキャリア発達の課題に即した系統的な取組や各教科の学習と結び付けた取組等を一層推進し、計画性・体系性を持った展開へと改善を図っていく必要がある」としている。また、「キャリア教育に関する校内研修に「参加したことがない」担任は約 5 割に及んでいる」ことから

「一人一人の教員のキャリア教育への理解を深め、系統的な実践に発展させるための取組の拡充が喫緊の課題である」と指摘している。

## 2. 研究の目的

2011 年答申では、「キャリア教育は、キャリアが子ども・若者の発達の段階やその発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくことを踏まえ、幼児期の教育から高等教育に至るまで体系的に進めることが必要である。」とした上で、キャリア教育の意義・効果として、「第一に、キャリア教育は、一人一人のキャリア発達や個人としての自立を促す視点から、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。各学校がこの視点に立って教育の在り方を幅広く見直すことにより、教職員に教育の理念と進むべき方向が共有されるとともに、教育課程の改善が促進される。第二に、キャリア教育は、将来、社会人・職業人として自立していくために発達させるべき能力や態度があるという前提に立って、各学校段階で取り組むべき発達課題を明らかにし、日々の教育活動を通して達成させることを目指すものである。このような視点に立って教育活動を展開することにより、学校教育が目指す全人的成長・発達を促すことができる。第三に、キャリア教育を実践し、学校生活と社会生活や職業生活を結び、関連付け、将来の夢と学業を結び付けることにより、生徒・学生等の学習意欲を喚起することの大切さが確認できる。このような取組を進めることを通じて、学校教育が抱える様々な課題への対処に活路を開くことにもつながるものと考えられる」と整理している。また、「キャリア教育を十分に展開するためには、学校が家庭や地域・社会、企業、経済団体・職能団体や労働組合等の関係機関、NPO 等と連携することが不可欠である。このように、学校と様々な者がパートナーシップを発揮して、互いにそれぞれの役割を認識し、一体となった取組を進めることがますます重要となっている」と指摘している。

以上より、学校の教育課程編成上にキャリア教育を明確に位置付け、教職員のキャリア教育への理解を深め、生徒に必要な力(図 1)の育成やキャリア発達を促すために、学校内外と協働体制を構築する。そして、教育活動によってどのような効果や成果をもたらすのかを検証することを目的とする。

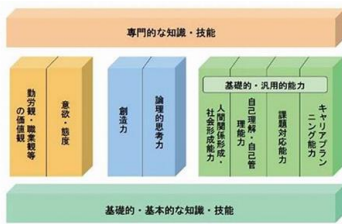


図1 社会的・職業的自立, 社会・職業への円滑な移行に必要な力の要素 (中教審答申, 2011)

### 3. 研究仮説

- (1)進路指導委員会(進路指導主事, 各学年進路指導担当を構成員とする組織)と関係する委員会を組織的に機能させることで, 学校全体で取り組むキャリア教育を教育課程上に位置付けられるだろう。
- (2)学校内外とキャリア教育を推進するための協働体制を構築することで, キャリア教育の充実が図れるだろう。

### 4. 研究方法とその結果と考察

#### (1)先進的な実践事例の収集

東京都荒川区立第三中学校は, 目指す学校像を「全教育活動をキャリア教育の視点で捉え, 基礎的・汎用的能力を育成する学校」とし, 平成30・31年度荒川区教育委員会研究指定校として, 全校をあげて研究を推進している。研究紀要(2018)によると, 「研究授業の指導案には, 必ず次のキャリア教育の基礎的・汎用的能力の4能力と4種類の要素をマトリックスの表で位置付け, 授業内容に応じてどの視点で授業改善するのかを意識化する事で授業の質を高める検証をする」として, 「授業の質そのものの在り方, 手法を検証する観点から教科を超えてグループ協議を実施」していた。なお, 4種類の要素とは「①協働的問題解決能力の視点」, 「②ICT機器活用授業の視点」, 「③学校図書館活用授業の視点」, 「④外部人材活用授業の視点」である。

東京都中野区立緑野小学校は, 平成30年度の学校経営の基本方針として「生命尊重と人権教育を基盤として, キャリア教育を推進し, 「自律」, 「協働」, 「参画」の視点から豊かな心の育成, 確かな学力の定着, 体力の育成」を図っている。研究リーフレット(2018)によると, 「国立教育政策研究所が開発した「勤労観, 職業観をはぐくむ学習プログラム」の枠組みに, 現在の3校の教育実践をあてはめていきました。これにより, 緑野中学校区に関連する全ての教員が, 全ての教育活動で「キャリア教育」の実践について意識することができました。また, 「キャリア教育」という視点で何ができるか, 何が欠けているのかを見つめ直すための重要な資料」にもなったとしている。さらに, 授業づくりの考え方として「縦軸に「育成すべき資質・能力(基礎的・汎用的能力)」を据え, 横軸に「学校図書館・ICT活用型授業」, 「話し合い・協議型授業」, 「外部人材活用型授業」の3つの柱を設定することで「育成すべき資質・能力(基礎的・汎用的能力)」を明らかにして授業を開発」しており, 日常的に主体的・対話的で深い学びの授業実践をしていた。

以上の実践事例に共通するキャリア教育を充実させる取組として, 教職員のキャリア教育への理解を深める校内研修を実施し, 教育課程や学習指導案をキャリア教育の視点で見直し授業を改善していた。

#### (2)実態把握のための生徒へのアンケート調査

文部科学省(2011)を基に設計した質問紙を用いて, 基礎的・汎用的能力に関するアンケート調査(図2)を平成30年度10月及び令和元年7月に実施した。人間関係形成・社会形成能力に関する質問項目は①～③, 自己理解・自己管理能力に関する質問項目は④～⑥, 課題対応能力に関する質問項目は⑦～⑨, キャリアプランニング能力に関する質問項目は⑩～⑫となっている。

本研究では, 回答(4点:いつもしている, 3点:時々している, 2点:あまりしていない, 1点:ほとんどしていない)として, 平均値を算出して分析した。

日常生活(授業中や放課後, 家庭での生活等全般を含みます)の様子を振り返って, 当てはまる番号(1~4)に○を付けてください。	
①	友だちや家の人の意見を聞くとき, その人の考えや気持ちを受け止めようとしていますか。
②	相手が理解しやすいように工夫しながら, 自分の考えや気持ちを伝えようとしていますか。
③	自分からや仕事を見つたり, 分担したりしながら, 周囲と力を合わせて働こうとしていますか。
④	自分の興味に関心, 長所や短所について, 把握(理解)しようとしていますか。
⑤	気持ちが沈んでいるときや, あまりやる気のない物事に対するときでも, 自分すべきことに取り組もうとしていますか。
⑥	不得意なことや苦手なことでも, 自ら進んで取り組もうとしていますか。
⑦	分からないことやもっと知りたいことがあるとき, 自分から進んで資料や情報を収集したり, 誰かに質問をしたりしていますか。
⑧	何か問題が起きたとき, 次々同じような問題が起これないようにするために, 何をすればよいか考えていますか。
⑨	何かをするとき, 見通しをもって計画的に進めたり, そのやり方等について改善を図ったりしていますか。
⑩	学ぶことや働くことの意味について考えたり, 今教で学んでいることと自分の将来とのつながりを考えたりしていますか。
⑪	自分の将来について具体的な目標をたて, その実現のための方法を考えたりしていますか。
⑫	自分の将来の目標に向かって努力したり, 生活や勉強の仕方を工夫したりしていますか。

図2 基礎的・汎用的能力に関するアンケート調査

令和元年度の第1学年の平均値は平成30年度の第1学年と比べるとおおむね同程度である。昨年度の進路指導委員会や職員会議で各学年の進路指導・キャリア教育年間指導計画を見直し, 本年度より実施してきたが課題対応能力に関わる質問項目⑦, ⑨とキャリアプランニング能力に関わる質問項目⑩の平均値が3.00を下回っていた。中学校では定期考査が始まり, 適切な計画を立てて, 学習していくことが求められるようになる。学級担任を中心に学習面や生活面の指導はしているものの, その変化に対応できていない生徒が否定的回答をしていると考えられる。よって, 令和元年度の第1学年は課題対応能力とキャリアプランニング能力の育成が特に課題であると考えられる。(図3)

令和元年度の第2学年の平均値は平成30年度の第2学年と比べると①～⑥の項目で同等か下回っているが, ⑦～⑫の項目は上回っている。第2学年では職場体験活動に向けて職業調べや卒業後の進路について考える進路指導・キャリア教育を実施しており, 興味や関心に基づく勤労観, 職業観の形成ができています。一方で, 平成30年度及び令和元年度ともに質問項目⑤, ⑥の平均値が3.00を下回っていた。

自らの思考や感情を律し、今後の成長のために進んで学ぶ力を育成する教育活動が乏しいことが原因と考えられる。よって、令和元年度の第2学年は自己理解・自己管理能力の育成が特に課題であると考えられる。(図4)

令和元年度の第3学年の平均値は平成30年度の第3学年と比べるとすべての項目で大幅に下回っている。特に、⑥の平均値が0.6ポイントの差がある。平成30年度の第3学年は令和元年度第3学年と比べて約40名も多く、他者の多様な考えや意見を聴いたり他者と協働したりする機会が多いと考えられる。そのため、自分自身の理解や他者から学び自律する環境の中で成長していったと考えられる。また、令和元年度の第3学年は質問項目⑤～⑦、⑨～⑫の平均値が3.00を下回っており、平成30年度の時と比べても改善が図れなかった。第3学年進路指導・キャリア教育年間指導計画に沿って、計画的に進路指導・キャリア教育を実施してきたが、進学指導に偏った内容だったために、自己理解・自己管理能力や、課題対応能力、キャリアプランニング能力の育成が図れなかったと考えられる。よって、令和元年度の第3学年は自己理解・自己管理能力とキャリアプランニング能力の育成が特に課題であると考えられる。(図5)

以上のアンケート調査の結果と分析を踏まえて、中学校3年間を通じて育成を目指す資質・能力や生徒像を校内で検討しながら教職員のキャリア教育への理解を深め、授業実践や学習指導案等の改善を通して生徒の基礎的・汎用的能力等の資質・能力を育成することが重要であるとする。

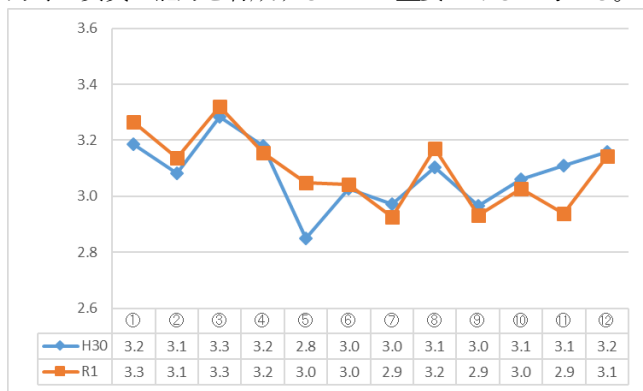


図3 第1学年生徒の基礎的・汎用的能力に関する意識の実態

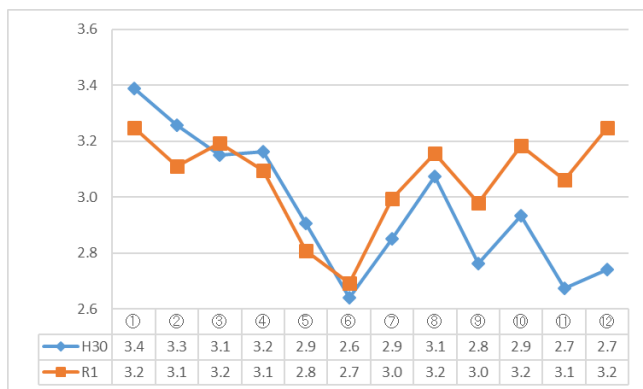


図4 第2学年生徒の基礎的・汎用的能力に関する意識の実態

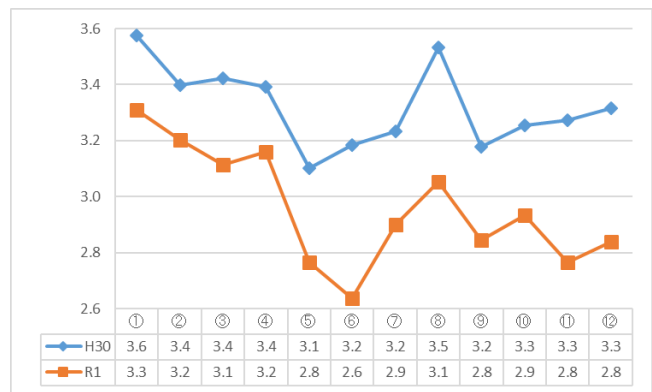


図5 第3学年生徒の基礎的・汎用的能力に関する意識の実態

### (3) 令和元年度の教育課程の編成と校内での検討

平成30年度を取組を基に、令和元年度の教育課程にキャリア教育を位置付けて編成し、本校の進路指導主事や研修主任と検討した。さらに、平成30年度の教育課程検討委員会や校務分掌会、運営委員会等を経て、令和元年度の教育課程素案にキャリア教育を位置付けた。(図6)

キャリア教育の各学年重点目標	
第3学年	
自己実現【主体的に進路を選択しよう】	
主体的に進路を選択し、希望する進路に関する情報を収集し、進路実現に向けて行動する態度を育てる	
キャリア教育で生徒に身に付けさせたい力(基礎的・汎用的能力)と具体的内容(例)	
キャリアプランニング能力	
<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路や職業に関する情報を活用し、自己の進路や生き方を考えていく</li> <li>○将来の職業生活との関連の中で、今の学習の必要性や大切さを理解する</li> <li>○様々な職業の社会的役割や意義を理解し、自己の生き方を考える</li> <li>○自分の考えと責任で判断し、自らの意志で決定、実行していく</li> </ul>	

図6 進路指導・キャリア教育全体指導計画(一部)

### (4) 校内研修計画の設定

平成31年度(令和元年度)第1回の職員会議での提案、協議を経て、校内研修計画に進路指導・キャリア教育の研修を盛り込んだ。具体的には、年度内に1人1回以上の研究授業を実施し、学習指導案にはキャリア教育の視点(生徒が「何ができるようになるか」の具体的内容と「基礎的・汎用的能力」)を明記することになった(図7)。

これにより全校体制でキャリア教育に取り組めるよう土台が出来上がった。学習指導案の作成では、担当教科の指導のねらいや教材とキャリア教育の視点とがどのように関連するのかを検討したり、教科部会で年間指導計画等と照らしながら協議したりする姿を職員室で見受けられるようになった。さらに、これまでの研究協議会では、他教科の担当者は教科指導に対する意見を発表しづらい傾向があった。しかし、キャリア教育の視点という共通するねらいが盛り込まれたことで、教科横断的な協議ができるようになった。また、他教科からのキャリア教育の視点によって自身の担当教科に新たな視点を発見することにもつながり、研究協

議会の内容が質、量ともに向上した。

第3学年4組 理科 学習指導案(例)				
1 単元名 土中の微生物のはたらきを調べよう(B-6 生物と環境)				
2 単元について				
(1)単元観 (2)生徒観				
本学級の進路指導・キャリア教育実態調査(7月実施、有効回答数33名)の結果				
(理科の授業について)	4 とても	3 わたし	2 あまり	1 まったく
理科の授業での学習は	思う	そう思う	そう思わない	そう思わない
1 普通の生活に役立つ	5	10	12	6
2 なぜ大切なのか分からない	4	13	10	6
3 将来、働く上で役立つ	6	8	13	6
(3)指導観				
3 研修課題との関わり				
4 指導目標【評価規準】				
5 指導計画				
6 本時の学習				
(1)本時のねらい				
①土中の微生物のはたらきに関心を持ち、自ら進んで調べようとする。 【関心・意欲・態度】				
②対照実験の結果から、自然界の中での微生物の役割を見いだす。 【科学的な思考・表現】				
(2)展開				
過程	学習活動	○教師の働きかけ ・予想される生徒の反応	◎評価【評価方法等】 ・指導上の留意点 ●キャリア教育の視点	時間
課題の解決	9 実験を行う。	○班で予想したことと比較しながら、結果を考察させる。	●主体的に課題を解決している。 【課題対応能力】	
	10 結果をふまえ、課題について考察する。(個人→班)	○結果をもとに課題に対する答えをレポートにまとめさせる。 ○レポートに結果や考察等をまとめ、振り返りや自己評価を書かせる。		
(3)板書計画 (4)備考 (5)資料				

図7 キャリア教育の視点を盛り込んだ学習指導案

また、研究組織の1つである調査研究部の研究内容として、進路指導・キャリア教育実態調査を年4回実施することになった(図8)。

研修推進委員会		
校長・教頭・教務主任・研修主任・各部長		
【授業研究部】 ・掲示物や指導案の共有 ・研究授業の記録、分析	【自主学習研究部】 ・学習の手引きの発行 ・家庭学習状況調査の分析	【調査研究部】 ・日常生活アンケート ・進路指導・キャリア教育実態調査

図8 研究組織(一部)

さらに、研修計画に進路指導・キャリア教育研修を位置づけ、教職員のキャリア教育への理解を深め、キャリア教育の充実を図れる計画を設定した(図9)。

月	日	研修内容(キャリア教育と特に関連する内容)
4	2	・全体研修会(今年度の研修についての提案)
	9	・研修推進委員会①(今年度の研修の進め方)
	17	・全体会及び分科会(指導案の書き方等)
6	10	・全体研修会(指導案の書き方等)
	20	・研修推進委員会②
8	21	・全体研修会 (進路指導・キャリア教育実態調査の結果と分析)
	26	・研修推進委員会③
9	9	・支援担当訪問(研究授業:理科,保健体育)
10	17	・教科部会(今年度の取組の進捗状況の確認)
12	9	全体研修会(部会ごとの取組の分析と検証)
1	9	分科会(今年度の成果と課題,来年度に向けて)
2	6	・教科部会(今年度のまとめ,来年度に向けて)
	13	・研修推進委員会④(今年度の成果と課題)
3	3	・教科部会(今年度のまとめ,来年度に向けて)
	19	・全体研修会(今年度のまとめ,来年度に向けて)
	24	・研修推進委員会⑤

図9 令和元年度 研修計画

#### (5)進路指導委員会の活動

進路指導委員会では、本年度の取組として、「一人一人の生徒が、自分自身を見つめ、自分と社会の関わりを考え、将来、様々な生き方や進路の選択可能性があることを理解し、自らの意志と責任で自己の生き方や進路を選択できるよう、教職員が適切な指導・援助が行えるようにすることを目的」に「進路指導・キャリア教育の充実に向けての手引き」と、生徒の実態を把握するために「進路指導・キャリア教育実態調査」を作成した。また、それらを参照できるように校内ネットワーク内に専用のフォルダを用意した。実態調査の結果については、進路指導委員会での検討を経て、関係する委員会へと伝達し、効果を検証する体制を構築した。

さらに、各教科等部会で「それぞれの教育活動は、どの基礎的・汎用的能力を育成することにつながっているのか」を検討し、令和元年度末までに各教科等主任を中心に年間指導計画をキャリア教育の視点で見直している。

#### (6)定期的な実態調査の実施

進路指導・キャリア教育実態調査を令和元年度4,7,11月に実施し、結果を集計(有効回答数は、4月は第1学年149名,第2学年149名,第3学年144名,7月は第1学年135名,第2学年148名,第3学年144名,11月は第1学年143名,第2学年144名,第3学年149名)した。本研究では、指標値を用いた。すべての回答者が4(4:とても思う,3:わりと思う,2:あまりそう思わない,1:まったくそう思わない)と回答すると指標値は100

となり、反対に1と回答すると0となる。

図10「将来、つきたい職業は明確に意識している」では各学年とも肯定的回答と否定的回答がおおよそ半々である。つまり、2極化している傾向にある。また、1、2学年は下降傾向にある。これは、1学年では、自分の希望していた職業に就くことが難しいと感じる生徒が増加することが関係していると考えられる。また、2学年では、職場体験活動へ向けた進路指導を計画的に実施してきたはずであるが、関連する行事が終わると意識が低下している。このことから、キャリア教育は計画的に実施する必要があることが分かる。3学年は、進路選択へ向けた進路指導を計画的に実施しているが、将来の職業意識は低い水準にとどまっている。

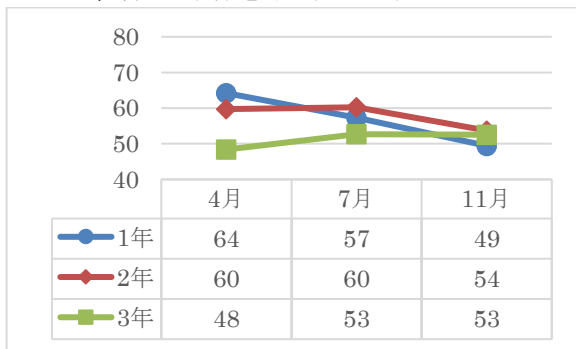


図10 「将来、つきたい職業は明確に意識している」

図11「進路について考える授業や行事は自分にとって興味がある」では年度当初と比べると全学年で上昇傾向にある。これは、今年度から進路指導・キャリア教育全体及び年間指導計画を見直し、必要に応じて進路指導委員会が各学年の進路指導・キャリア教育の指導計画や方針を確認しながら指導に当たってきたことが成果として現れたと考えられる。

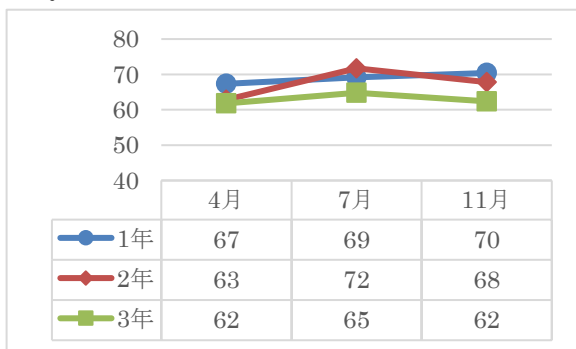


図11 「進路について考える授業や行事は自分にとって興味がある」

図12「進路について考える授業や行事は普段の生活に役立つ」では2、3学年は約半年間で大きな変化は見られなかった。一方で、1学年は12ポイント程度減少している。進路指導・キャリア教育全体及び年間指導計画を見直し指導に当たってきたが、1学年は3学期に進路指導・キャリア教育の一環で上級学校調べをやる予定で、まだ進路が自分事になっていないことが要因だと考えられる。

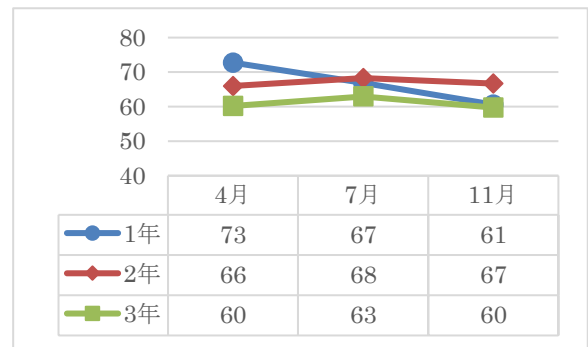


図12 「進路について考える授業や行事は普段の生活に役立つ」

図13「進路について考える授業や行事は大切だ」では2学年は大幅に上昇傾向にある。一方で、1、3学年は減少傾向にある。2学年では1学期から職場体験学習へ向けて進路学習を計画的に実施してきた成果だと考えられる。

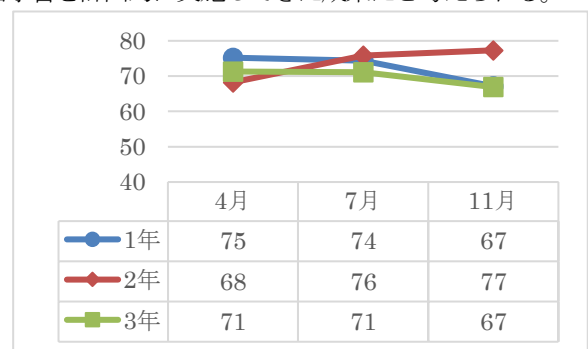


図13 「進路について考える授業や行事は大切だ」

図14「道徳の授業での学習は普段の生活に役立つ」では全学年約半年間で大きな変化は見られなかった。全校をあげて、道徳科の授業を計画的に実践し、相互の授業参観や研究授業の公開、校内研修等に取り組んできたが、有用観の変容は見られなかった。

図15「道徳の授業での学習は大切だ」では、2学年はやや上昇傾向にある。一方で、1、3学年は減少傾向にある。学年が上がるにつれて肯定的回答の割合が減少していくことが分かった。

図16「道徳の授業での学習は将来、働く上で役立つ」では、2、3学年は約半年で大きな変化は見られなかった。1学年は肯定的回答の割合が減少傾向にある。

毎月の道徳の重点目標とキャリア教育との関連を提示してきたが、まだ道徳科とキャリア教育の視点や道徳科の目標と日常生活とが教職員の間で結びついていないことで指導のねらいが達成されていないことが要因だと考えられる。教職員がねらいを理解した上で指導に当たれるようにすることが課題であると考えられる。

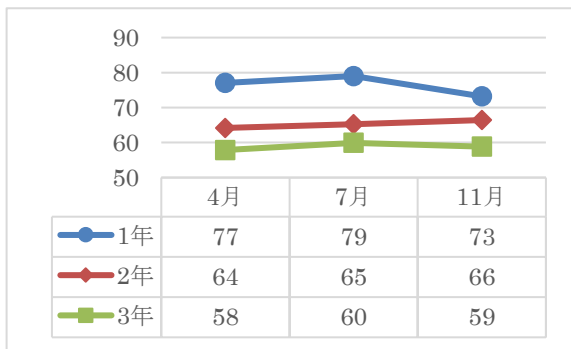


図 14 「道徳の授業での学習は普段の生活に役立つ」

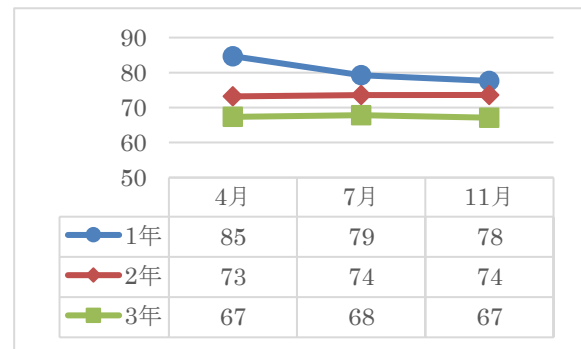


図 17 「先生以外の大人の話聴くことは普段の生活に役立つ」

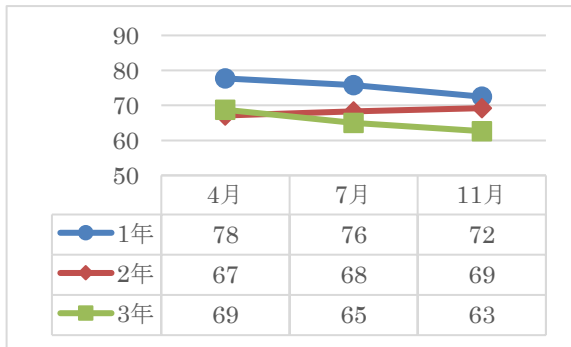


図 15 「道徳の授業での学習は大切だ」

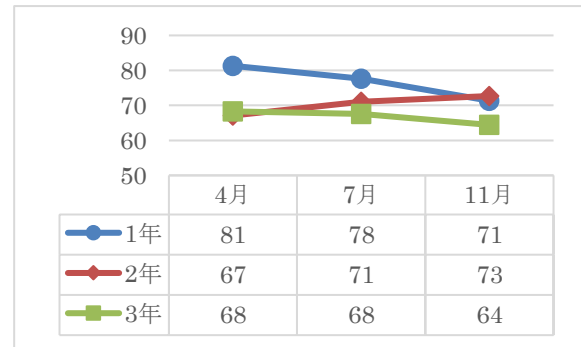


図 18 「先生以外の大人の話聴くことは大切だ」

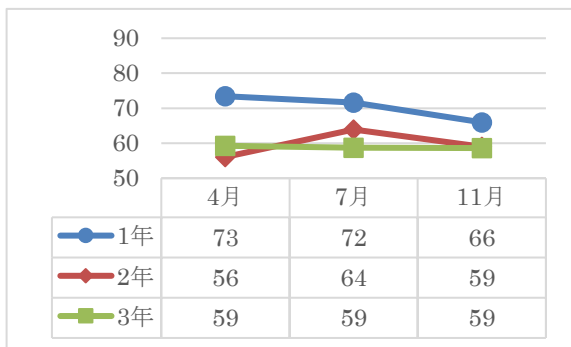


図 16 「道徳の授業での学習は将来、働く上で役立つ」

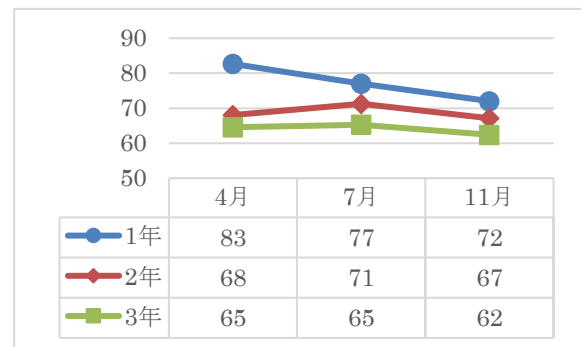


図 19 「先生以外の大人の話聴くことは将来、働く上で役立つ」

図 17 「先生以外の大人の話聴くことは普段の生活に役立つ」、図 18 「先生以外の大人の話聴くことは大切だ」、図 19 「先生以外の大人の話聴くことは将来、働く上で役立つ」のそれぞれで1学年が減少傾向にある。これは、1学年では、授業や学校行事で先生以外の大人の話聴く機会がほとんどなかったことが要因であると考えられる。2、3学年は先生以外の大人の話聴く機会があったがほとんど変化が見られない、または減少傾向にある。単発の授業や行事では、ほとんど効果がないということが推察される。よって、職業観や勤労観を育むために、特別活動の全体計画及び年間指導計画に先生以外の大人の話聴く機会を位置付けて、キャリア教育の要である特別活動を計画的に実施していくことが必要であると考えられる。

図 20～25 が示すように、部活動や生徒会活動の有用感等には、大きな変化が見られなかった。生徒会活動は特別活動の一環として生徒が自発的、自治的に活動しているものだが、キャリア教育の要となる特別活動が、本校ではキャリア教育の視点では効果を上げていない実態が分かった。教育効果があるだろうという経験や思い込みではなく、生徒の実態に即して、特別活動の全体計画及び年間指導計画を体系的に作成し、それぞれのねらいや内容を踏まえた上でキャリア教育と関連付ける必要があることが分かった。

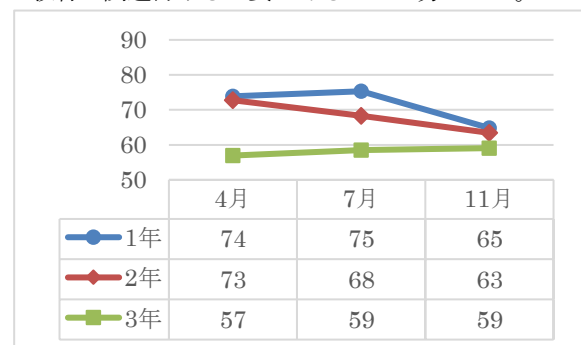


図 20 「部活動は、普段の生活に役立つ」

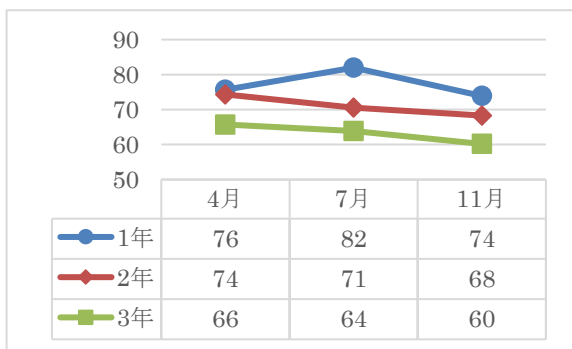


図21 「部活動は、大切だ」

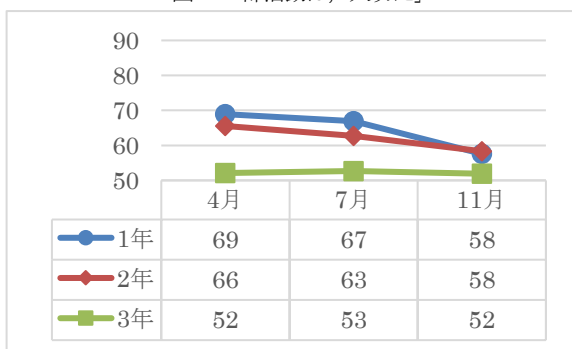


図22 「部活動は、将来、働く上で役立つ」

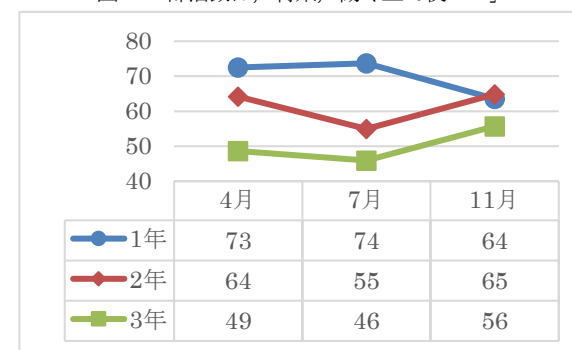


図23 「生徒会活動は、普段の生活に役立つ」

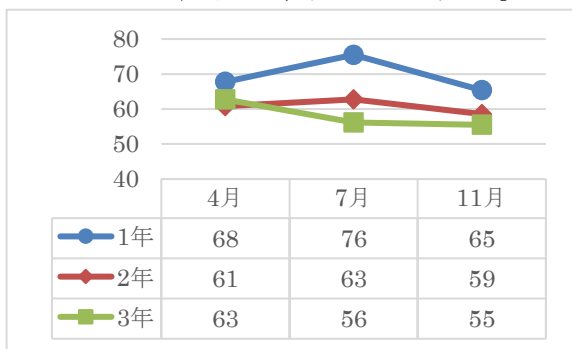


図24 「生徒会活動は、大切だ」

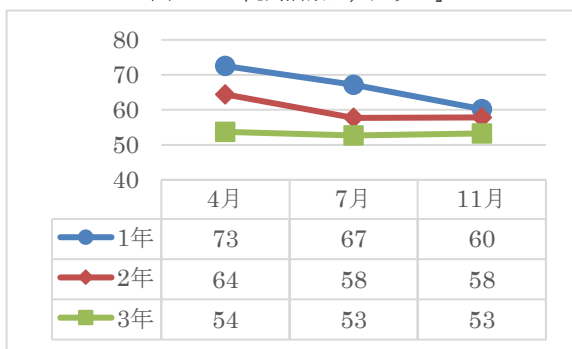


図25 「生徒会活動は、将来、働く上で役立つ」

理科部会では、全体及び年間指導計画をキャリア教育の視点で見直し、他の各教科等に先行してキャリア教育の視点で授業改善に取り組んできた。しかし、図26～28に示すように、各学年の指標値を上昇させることにはできなかった。日常生活や社会との関連を重視した指導を行うことや理科を学ぶことの意義、有用性が実感できる指導の工夫が必要であり、さらにそれらを理科部会の中で検証し、お互いの授業改善に役立てていく必要があると考えられる。

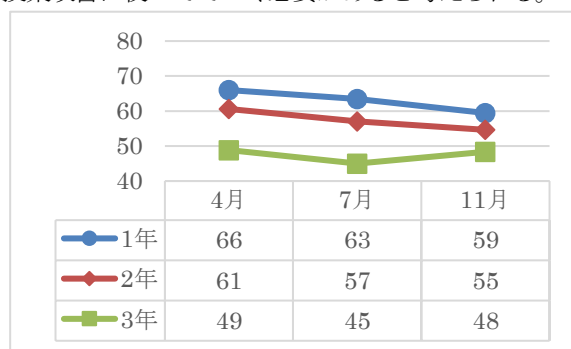


図26 「理科の授業での学習は、普段の生活に役立つ」

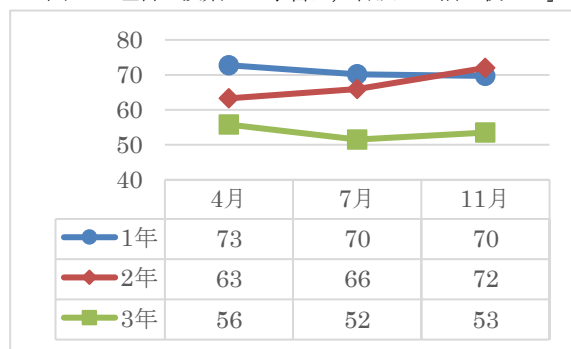


図27 「理科の授業での学習は、大切だ」

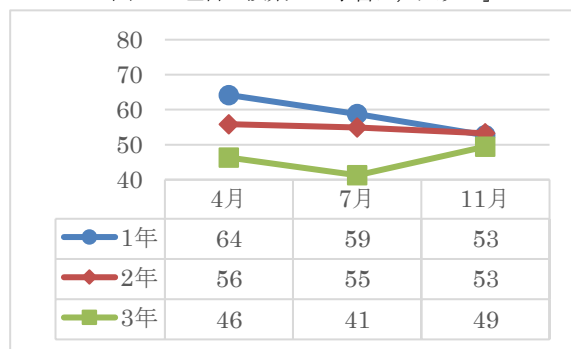


図28 「理科の授業での学習は、将来、働く上で役立つ」

## 5. まとめと今後の課題

### (1) 進路指導・キャリア教育実態調査の継続的な実施

結果から①学年が上がるにつれて、肯定的回答の割合が減少していく、②月日が経つにつれて、肯定的回答の割合が減少していくことが分かった。3学年は進路決定の時期に当たり、特に進路指導・キャリア教育の実践を計画的に取り組んできたが、肯定的回答の割合が向上していかなかった。これは、実践の内容がいわゆる進学指導や受検を見据えた進路指導に偏っていたことが原因であると考えられる。つまり、これまでの本校の進路指導・キャリア教育では、生徒のキャリア発達が育成されていないことが明らかになった。

(2)各教科等の年間指導計画にキャリア教育を位置付ける  
進路指導・キャリア教育全体及び年間指導計画に目指す生徒像や身に付けさせたい資質・能力を明記しただけでは、生徒のキャリア発達の育成にはつながらないことが実態調査で明らかになった。そこで今後は進路指導委員会と関係する委員会で実態調査の結果を熟考し、1～3月にかけて来年度の各教科等の全体及び年間指導計画を編成していくことが今後の課題である。

(3)年間指導計画に基づいてキャリア教育を実践する

(2)が作成されることで、各教科等の教育活動においてキャリア教育の充実が図られると考えられる。そして、目指す方向性が定まることで、各教科等の委員会で協議する視点がキャリア教育の視点になり、組織の構成員が入れ替わってもその方向性は変わらなくなる。方向性が明確になれば全校体制でキャリア教育をさらに充実させることができると考えられる。その方向性をより具体的なものにするために、次の通り取り組んでいくことが今後の課題である。

【各教科等の全体及び年間指導計画の作成方針】

- ・1つの単元を通して、生徒が「何ができるようになるか」の具体的内容と基礎的・汎用的能力とを照らし合わせ、適当な能力を位置付ける

【計画の共有とファイルの在処の明確化】

- ・職員会議を通して紙面で教職員の間で共有することはこれまで実行されてきたが、作成した電子データを教職員全体で共有する仕組みが確立されていなかった。そこで、担当へ働きかけ、次のような仕組みにする

「校内共有」→「全体計画・年間指導計画案」→「2020年間指導計画」→「2020各教科等のフォルダ」→「2020各教科等の全体(年間)指導計画のファイル(Excel)」

(4)新学習指導要領の全面实施を見据えた研修の充実

進路指導委員会と関係する委員会を組織的に機能させることで、全校体制でキャリア教育に取り組もうとする土壌はできた。生徒が「何ができるようになるか」の具体的内容やそもそもキャリア教育とは何か、また担当教科の授業でどのような実践を行えばよいのか等の具体的な議論が本年度より教職員間で活発になった。一方で、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準にばらつきがあることが校内研修の一環として取り組んだ研究授業を通して課題として浮かび上がった。進路指導委員会と校内研修推進委員会等の関係する委員会で成果と課題を検証し、令和2年度からのキャリアパスポートの実施及び令和3年度の新学習指導要領の全面实施を見据えて、全校体制でキャリア教育に取り組めるように、さらに研修を深めていく必要がある。

(5)根拠に基づいた教育課程の継続的な改善

本年度の取組によりキャリア教育を推進するための協働体制を構築できたことで、実態調査に基づいて研修の充実や教育課程の改善に生かしていく土台ができた。具体的には実態調査の結果という根拠があることで、研究協議の軸が肯定的回答の割合の向上等と明確になり、教職員同じ視点で議論することができるようになった。このことにより、

これまでの経験や勘等の個人の感覚から生徒の実態という事実に基づいて協議することができるようになった。来年度も実態調査を実施する予定である。目指す生徒像や生徒が「何ができるようになるか」という身に付けさせたい資質・能力を軸に教育課程が編成されているかを継続的に検証し、キャリア教育の視点でさらなる改善に取り組んでいくことが今後の課題である。

## 7. 参考文献

- 1) 中央教育審議会(1999)『初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)』
- 2) 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会(2009)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(審議経過報告)(1/3)』
- 3) 中央教育審議会(2011)『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)』
- 4) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査 第一次報告書(概要版)ーキャリア教育の現状と課題に焦点をあててー』
- 5) 文部科学省(2011)『中学校キャリア教育の手引き』
- 6) 文部科学省(2017)『中学校学習指導要領(平成29年告示)』
- 7) 埼玉県教育委員会(2016)『埼玉県中学校進路指導・キャリア教育指導資料ー「自分を活かす」進路選択ー』
- 8) 荒川区立第三中学校(2018)『基礎的・汎用的能力を育むアクティブラーニングの在り方ー21世紀型能力の育成を目指してー』
- 9) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2013)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書』
- 10) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について』
- 11) 公益財団法人日本進路指導協会(2018)『第67回進路指導・キャリア教育研究協議会全国大会要項』, 84-87.
- 12) 東京都荒川区立第三中学校(2018)『学校経営方針』 Retrieved from <http://www.aen.arakawa.tokyo.jp/ARAKAWA-3-J/学校経営方針/>(検索日:2019年1月22日)
- 13) 東京都中野区立緑野小学校(2018)『校長だより第0号「平成30年度 経営方針」』 Retrieved from [http://nk-midorino-e.a.la9.jp/p\\_dayori/30pdayori00.pdf](http://nk-midorino-e.a.la9.jp/p_dayori/30pdayori00.pdf)(検索日:2019年1月22日)
- 14) 清水隆彦(2014)『キャリア教育で変える学校経営論「しかけ」が教員・生徒・保護者を動かす』実業之日本社
- 15) 藤田晃之(2014)『キャリア教育基礎論ー正しい理解と実践のために』実業之日本社
- 16) 藤田晃之(2018)『MINERVAはじめて学ぶ教職⑩キャリア教育』ミネルヴァ書房
- 17) 中央教育審議会(2018)『第3期教育振興基本計画について(答申)』